

和牛の脂肪壊死治験の2,3例について

誌名	日本獣医師会雑誌 = Journal of the Japan Veterinary Medical Association
ISSN	04466454
著者	田崎, 勇雄
巻/号	26巻9号
掲載ページ	p. 549-550
発行年月	1973年9月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



菌の眼球深部への2次感染による化膿性眼球炎へと波及し失明したものもある。本例は以上のような諸々の経過をとった。

治 療

流涙、浮腫、充血等、初期炎症のある時点では3%硼酸水洗眼あるいは抗生剤の注射、点眼等の併用が有効で症状の消失を見た。角膜欠損、粗硬化の時期では IDU (5-Iodo-2-deoxyuridine, 一般名 Idoxuridine) 軟膏がわずかながら効果が見られた。角膜の潰瘍、全面混濁した時期には酢酸コルチゾン点眼液 (一般名 コートン) あるいはアクリフラビン、ヨード剤の併用が効果があった。角膜の隆起、突出、限局性白斑ではいずれの薬品も効果は期待できず自然治癒を待つほかはなく、治癒まで極めて多くの方法をこころみしたが、いずれも著しい効果を見られなかった。

まとめおよび考察

初発生の A 1 牧場では、患畜発生の大部分は子牛では5月、成牛では6月に集中したが、その相違は牛群の抗

病性による差ではないかと推定される。

品種別にはヘレフォード、ホルスタイン、短角、ジャージーと品種、雌雄をとわず発症している。

病牛の治療は軽症のものには抗生剤の点眼、注射、角膜に病変の進んだものには酢酸コルチゾン点眼液、色素系の殺菌剤、ヨード剤等の併用が効果をもたらし、IDU もわずかながら効果があった。

また、薬治療の徹底と共に紫外線照射、ハエ等の物理的、機械的感作を避けるための眼包帯使用、隔離畜舎への収容が症状を好転に導いた。

本病のまん延を防止するためには早期発見、患畜隔離による直接接触感染の防止と媒介昆虫ハエ等の防除は有効と考えられるが、本病の発生例を体験し集団飼育場に浸潤した場合は、脅威的な損失をこうむることから、本病は今後注目すべき疾病と考えられるので本発生例を報告し諸賢のご指導、ご教示を仰ぎたい。

なお、本演題は46年度県家保業績発表会、第1回北海道、東北地区家保業績発表会において一部発表した。

第187回日本臨床獣医学会 (九州) 期日：昭和47年10月20、21日 会場：熊本市 市民会館

和牛の脂肪壊死治験の2, 3例について

田崎 勇雄*

演者の開業している噌唖郡は黒毛和牛を年間約2万5千頭生産しているが、以前に比較して過肥のものが多くなり、その中に数年前より脂肪壊死の発生をみるようになった。そのうち腸閉塞を発生し、末期症状を呈したものについては従来治癒不能であった。演者は腹腔内に不正球状の脂肪壊死 (大は長径30cm以上) あり数十日間食思減退、下痢、便秘、血便、腸管狭搾 (直検に困難をきたす) 等廃用寸前のものに対し胃液、ビタミンA、D₃、E、はとむぎなどを処方したところ、いずれも短期間で食思好転、病状消失し、脂肪壊死は1カ月位後より欠刻を生じながら融解してゆく状態を直検により触知し得たので、以下若干の治験例を報告する。

使用薬品

1. ビタミン A, D₃, E (20 ml 1 カプセル中)
 ビタミン A 500,000 国際単位
 ビタミン D₃ 250,000 "
 ビタミン E 200 "
2. はとむぎ 脱稈したもの煎じて
3. 胃液 1回量 4l

例 I 黒毛和牛、雌 10才、高等登録牛、7産

鹿児島県 開業 (鹿児島県噌唖郡末吉町岩崎3613)

禀告：12カ月不受胎、4カ月位前より食思減退、やせてくる。診断を受けたところ脂肪壊死にて不治の診断あり。

現症：昭和43年7月9日初診時食思2/3、30×20cm 大不正球状脂肪壊死あり。

治療：ビタミン AD₃E 2. はとむぎ 1kg

経過：翌7月10日より食思好転、1カ月後より一掌大の欠刻を生じながら融解をはじめ。8月15日種付受胎。

昭和44年 AD₃E 1カプセル、はとむぎ 500g 宛2

回投与

昭和45年 同上

昭和46年 無処置

昭和47年9月一掌大の欠けた腕状をなす。

症例II 黒毛和牛、雌、4才

禀告：昭和43年4月30日分娩 (当時時価 45万円なり) その後食思減退、8月2日～9月2日まで食滞および脂肪壊死にて治療するも効果なく求診。

初診：昭和43年9月13日

現症：食思全廃、瘦削甚し、被毛粗剛、便秘する。脂肪壊死は不正球状径約25cmと、一開掌大扁平なるもの数個あり。

治療: ビタミン A D₃ E 2 カプセル, はとむぎ 1 kg 投与.

経過: 翌9月14日より食思発現, 9月20日頃より正常となる.

10月さらに同上治療をなす.

その後異常なきも, 昭和44年2月不受胎の故を以て売却.

症例Ⅲ 黒毛和牛, 雌, 5才

稟告: 昭和44年11月分娩, 昭和45年2月3日グラストタニー様疾患で治療するも好転せず求診.

初診: 昭和45年2月5日.

現症: 過肥, 食思全廃, 震戦, 便秘, 約30×20cm大1個, 一開掌大数個の脂肪壊死あり.

治療: ビタミン A D₃ E 1, はとむぎ 1kg, 胃液 4l 投与.

経過: 4時間後より食思発現, 2月6日病状去る.

昭和45年, 46年, いずれも A D₃ E 2, はとむぎ 1kg 宛投与.

昭和47年9月現在一開掌大厚さ 1.5 cm 大となる.

症例Ⅳ 黒毛和牛, 雌, 4才 (犢競市值 66万2千円也)

稟告: 昭和46年6月12日田圃に使役後下痢を発し, 食思減退, 好調な時でも平常の1/3以下しか食べない.

初診: 昭和46年8月23日

現症: 食思著しく減退, 下痢, T. 39℃, みるかげも

なく衰弱し, 皮膚被毛は光沢なく, 粗剛となる. 約30×20cmの脂肪壊死あり,

治療: 胃液 4l, A D₃ E 3, はとむぎ 3 kg, その後4回上診.

経過: 食思徐々に好転, 11月より正常となり受胎.

昭和47年8月分娩.

昭和47年10月食思正常, 被毛光沢あり, 下痢やまず. 脂肪壊死は1/3大となる.

症例Ⅴ 黒毛和牛, 雌, 7才, 高等登録牛

稟告: 昭和47年7月10日分娩予定, 食思全廃, 血便あり.

初診: 昭和47年7月2日

現症: 食思全廃, 血便, T. 39℃, 直検せんとするも腸管狭搾し困難なり, 約30×20cmほどの脂肪壊死あり.

治療: 胃液 4l, ビタミン A D₃ E 3カプセル, はとむぎ 1 kg を投与.

経過: 7月2日夕方より食思発現, 7月5日より正常となる. その後もビタミンとはとむぎを投与.

昭和47年10月現在脂肪壊死は6コ以上に分離し, 融解をはじめ. なお9月はじめより直検も容易となった.

以上のごとく5例とも本療法により脂肪壊死塊が融解縮少し, 臨床症状の改善がみられた. なお, 不妊牛検診等で脂肪壊死の存在を知った場合は予防的にビタミン A, D₃, E だけあるいははとむぎと併せて投薬しているが, 非常に効果的である.

犬の腸管寄生虫卵の比重について (II)

木原 滋 陽*

(日獣会誌投稿中)

* 大分県 開業 (大分県別府市京町3-27)

第188回日本臨床獣医学会 (中国) 期日: 昭和47年11月9, 10日 会場: 米子市 皆生温泉会館

吸入麻醉器と自動蘇生器とを連結した自動呼吸装置の考案について

久 宗 永*

自動呼吸装置は小動物外科領域においては必要な器具ではあるが高価なため十分に利用されていない. 私は比較的安価で安全かつ操作も簡単な装置につき種々検討した結果, 特殊三方活栓とコック付三方活栓を用い吸入麻醉器と自動蘇生器とを連動させれば満足できる装置の試作に成功したのでその概要について報告する.

* 岡山県 開業 (岡山県久米郡久米町坪井上)

1. 装置の概要

従来麻醉器係を配置しないで全身麻醉実施中に呼吸停止を来たした場合は作業を中断し, バッグによる人工呼吸を行っていたが, 本装置を使用することにより術中人工呼吸の必要が生じた場合は術者あるいは助手が作業を中断することなく2カ所のコック操作だけで簡単かつすみやかに自動呼吸回路に切替えて作業を続行, 自律呼